

## 審査の結果の要旨

氏名 FRANCOIS STEPHANE (ふらんそわ すてふあん)

**論文題目** Study on Re-evaluation of the Welfare Facilities Concept in the Urban Environment- Diversity of the institutional care facilities for elderly in Tokyo due to the drastic reforms of the care policy -  
都市環境の中における福祉施設計画概念の再評価に関する研究-制度改革に伴う東京の高齢者施設の多様化-

この論文は、高齢社会を迎えた日本において、高齢者福祉施設が各地で急速に増加している現状に鑑み、日本の高齢者福祉政策の意味する所を検証して、今後の日本における高齢者施設のあり方の提言を行なうことを目的としている。

本論文は、序章と終章のほか5章より構成される。

序章では、研究を開始するに至った動機、論文の三つのコンテキスト(高齢者福祉政策の変貌と高齢者の増加、都市環境自体、都市環境の中での施設の価値)の定義、研究方法、そして論文の構成を述べている。

第1章では、高齢化を辿る東京の現況と人口動態の詳細な分析、特に東京という都市環境を急激に変化させた社会・経済的側面の分析を通じて、「社会によるケア」に基づく歴史的な経緯の中で高齢者施設とそのサービスの必要性について論じている。

第2章では、第二次世界大戦前から大戦後の日本の高齢者ケアの発展の経緯と進化を分析し、日本の福祉政策が家族によるケアから、社会や制度によるケアに変わる状況をもたらし、さらにさまざまな高齢者ケアの供給手法が各地方自治体にそのサービスを委ねることになった経緯を考察している。特に最近のPPP(Public Private Partnership)の紹介や私的セクターが福祉分野に参画する意義を論じている。

第3章では、東京において高齢者人口比率の高い豊島(19.38%)・文京(19.31%)・台東(22.89%)・墨田(19.80%)の4区の選定を行い、高齢者福祉政策の変化が旧来の高齢者福祉

施設の施設形態を新しく多様なものにしていったかを論じている。特に、この環境の中でこれらの施設が如何に必要な改造を成し遂げて、周辺に適合していったかを分析している。そして、これらの施設が都市環境の中に溶け込むことが、そこを利用し滞在する高齢者のみならず周辺地域とつても恩恵のあるものであることを論じている。

第4章では、実地調査の内容を記述している。調査対象は、豊島区(デイサービス24施設、デイケア6施設、計30施設)、文京区(デイサービス15施設、デイケア4施設、計18施設)、台東区(デイサービス18施設、デイケア4施設、計23施設)、墨田区(デイサービス18施設、デイケア3施設、計21施設)である。調査は写真撮影と観察記述に基づくもので、各施設ごとに外観と立地、配置ダイアグラムと断面構成を示している。これらは1989年のゴールドプラン以来の高齢者福祉政策の変化によって、新しいタイプの施設形態の発生を検証する貴重な資料である。施設形態をモデル的なグラフィックで示すことにより、建築とその管理の関係を示している。主にデイケアサービスを対象にしてその施設が如何に周辺の都市環境の変化に適合していったかを論じている。結果として、空間とその意味と機能は周辺の都市環境との基盤になっていることを発見している。

第5章では、調査結果の分析として、多くの施設が複合的な機能を持つ施設であることに注目し、多様な機能の組み合わせを分析し、高齢者施設形態とその複合化が都市環境においては頻繁に発生し、同一敷地に複数の機能を持つことの重要さが画像資料と共に提示されている。

**終章では、以上の研究の結論をまとめている。高齢者福祉施設は都市機能の中で重要な役割りを果たし、東京という都市の発展の中で単一機能の建物としてではなく、複合した機能を持つ建物として寄与するものであると位置づけ、将来の発展の方向を示唆している。**

**以上のように、本論文は日本の高齢社会を背景にして、高齢者福祉施設の社会的・経済的な政策転換による影響を歴史的にも実証的にも詳細に分析し、今後の高齢者福祉施設の相方に対する基本的な知見を示し、建築計画学の発展に大きな寄与したものである。**

**よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。**